

動物意匠の形態変化からみた棒状鹿角製品の変遷

Changes in rod-shaped deer antler products from the perspective of changes
in the form of animal designs

青野 友哉
Tomoya AONO

【要旨】

北海道の棒状鹿角製品は、縄文晩期から続縄文前半期に用いられた動物意匠製品で、その形態や動物種の捉え方が研究者間で定まっていない。一方で、棒状鹿角製品は、本州で出土する縄文晩期から弥生中期の儀式である「有鉤短剣」と関連することが指摘されており、その形態的特徴の説明には、未だ不確定である北海道の動物意匠の理解が基になっている。本稿の目的は、棒状鹿角製品の成立や地域的影響関係を解明する前段階として、動物意匠の各部位の変遷を明示し、地域・器種を超えた部位の対応関係を示すことである。方法は、形態の把握が容易な石製品から各部位の形態変化を把握して、棒状鹿角製品に適用させる。次に骨角器の文様の変化を型式学的手法で整理して、棒状鹿角製品の形態変化の方向性を確かめる。結論として、北海道の棒状鹿角製品は形態から2型式に大別でき、両者は一部併存しながらも、先後関係にあることを文様の型式学的理解から示した。また、棒状鹿角製品の動物意匠は全身像ではなく、頭部のみの表現だと明らかにした。さらに、北海道の匙形製品と対比すべき本州の棒状鹿角製品は、川添分類の棒状1類であることを予察的に述べた。

キーワード：棒状鹿角製品、動物意匠製品、縄文晩期、続縄文前半期

【Abstract】

Rod-shaped deer antler artefacts excavated in Hokkaido reflect evolving animal designs from the final Jomon period to the early Epi-Jomon period. However, researchers are yet to establish a clear interpretation of their shapes or associated animal species. Rod-shaped deer antler products were found to be related to the 'hook-shaped dagger', a ritual tool excavated in Honshu, spanning the final Jomon period to the middle Yayoi period. Notably, the explanation of morphological characteristics is based on an inaccurate understanding of Hokkaido's animal designs. The purpose of this paper is to elucidate the shifts in each aspect of animal design and establish accurate correspondences across regions. This would serve as a preliminary exploration into the development of stick-shaped deer antler products and their regional influences. This method involves extrapolating morphological changes from comprehensible stone products and applying them to rod-shaped deer antler products. Next, I examined changes in bone and antler tool patterns using typological methods and confirmed the direction of morphological changes in these rod-shaped deer antler artefacts. In conclusion, an analysis of the morphology of rod-shaped deer antlers excavated in Hokkaido reveals divided broad classification into two types – old and new. Typological understanding indicates coexistence of these two types. It was also noted that the animal designs on rod-shaped deer antler products only depict the head, and not the entire body. Furthermore, it is predicted that rod-shaped deer antler products of Honshu, comparable to Hokkaido's spoon-shaped products, are rod-shaped products of type 1 in the Kawazoe classification.

Keywords: Rod-shaped deer antler products, animal design products, final Jomon period, early Epi-Jomon period

1 | 動物意匠に対する認識の共有

本州の弥生時代前期末から後期に併行する北海道の続縄文前半期には動物意匠を持つ製品が多く存在する。特に北海道南西部から道央部にかけての恵山文化圏においては、一見してクマを彫刻したと判断できる鹿角製匙形製品（スプーン）や有孔動物意匠製品（ペンダント）があるなど優品が多い。

一方で、棒状鹿角製品と呼ばれる一端が尖り、もう一端に動物意匠が付く用途不明の骨角器があり、動物の種類も研究者の主観により、クマ・鳥・海獣類・メカジキ・カメなど様々に推定されてきた。また、棒状鹿角製品は、本州各地で出土する縄文晩期から弥生中期の儀器とされる「有鉤短剣」（春成 1985）、「鹿角製儀器」（川添 2014）、「棒状鹿角製品」（川添 2014）との関連性が強いことが、春成秀爾や川添和暁により指摘されており、その形態的な特徴の説明には、未だ不確定である北海道の動物意匠の理解が基になっている（川添 2014; 川添 2022; 春成 2021; 春成 2023）。

本稿では、広域に分布する棒状鹿角製品の成立や地域的影響関係を解明する前段階として、動物意匠の各部位の変遷を検討し、本州出土の棒状鹿角製品の各部位との対応関係を示すことを目的とする。

方法は、形態が容易に把握できる北海道出土の石製・土製・鹿角製の有孔動物意匠製品と動物意匠付石棒を対象として、各部位の形態変化を把握したのちに、棒状鹿角製品に適応させる。次に各製品の年代的検討に必要な骨角器の文様の変化について型式学的手法で整理するとともに、棒状鹿角製品の形態変化の方向性を確認する。

2 | 棒状鹿角製品をめぐる近年の動向

春成秀爾は有鉤短剣を全国的に集成し、縄文中期から弥生後期までの分布と機能、社会的背景について論じた。特に、墓址・人骨との共伴例による性別・抜歯を分析し、有鉤短剣が在地の男性集団に偏在することを示した（春成 1985）。

この時、春成により最古の例が福島県大畑遺跡 B4 号人骨共伴の「棒状鹿角製品」（馬目編 1975）であることが示されている。

その後、川添和暁は愛知県朝日遺跡出土の棒状鹿角製品の位置付けを検討したことを契機として、春成論文以後に出土した資料の全国的な集成を行っている（川添 2001）。また、縄文／弥生移行期の鹿角製儀器には棒状鹿角製品と有鉤鹿角製品があり、それらを計 13 類に分類し、素材の利用、部位構造、使用状況、廃棄の様相の検討を整理して変遷案を示している（川添 2014）。同時に、棒状鹿角製品は縄文晩期後半に系譜をたどれ、主として晩期末から弥生中期前半に存在し、狩猟・漁猟活動を重要視する集団を象徴する道具であったと論じている（川添 2014）。

さらに、本州出土の棒状鹿角製品は北海道続縄文期に存在する動物意匠を持つ棒状鹿角製品¹⁾と同種のものであることを、部位構成の比較によって明らかにした点は特筆される（川添 2022）。

その前年に春成は、千葉県荒海貝塚出土資料の位置付けを行い、関東から東海地方への地域的な影響関係があることに言及すると同時に、荒海貝塚出土の最古例もすでに動物が簡略化されていることから、北海道有珠モシリ遺跡などのクマの全身像（匙形製品）と関連することを予察として述べている（春成 2021）。そして、「熊の意匠をもつ棒状短剣」として、具体的に北海道出土の事例との影響関係についても言及し、動物意匠のモチーフがクマであることを論じている（春成 2023）。

これまでの研究では、棒状鹿角製品の全国的な集成と形態分類がなされ、文様による時期の細分化と時期別の分布傾向から地域間の影響関係について明らかになりつつある。特に、南関東の荒海貝塚の時期が古く、最多の 5 点が出土していることから、この地域から各地へ広がったとの見方が定着している。また、地域も中国地方から北海道まで分布が広がることも明らかになってきた。

問題点としては、北海道出土の棒状鹿角製品に付けられた動物意匠の部位に対する共通認識が確立していない点が挙げられる。そのため、本来の動物意匠の製作意図と時間的経過による形態変化の解明に至っていないと考える。これは本州出土の棒状鹿角製品の部位の捉え方にも関わり、同製品の分類基準や対比すべき対象の選定にも影響する。

棒状鹿角製品の動物意匠は、他の動物意匠製品と比較

することで、部位を理解することができる。その過程を経てこそ、匙形製品の動物意匠（クマ）との比較が可能になると考える。

3 | 動物意匠製品の形態変化

北海道出土の動物意匠を持つ棒状鹿角製品は、端部にある2つの穿孔部分が動物の目の表現であることは理解しやすいが、他の突起や刻線に関しては研究者間でも意見の一致を見ない。また、目以外の穿孔には造形表現だけではなく、紐を通し連結させるなどの機能的な側面も考えられるため、両者の区別も必要となる。

そこで、動物の造形表現の理解のために、縄文晩期から続縄文前半期の有孔動物意匠製品（石製・土製・角製）と動物意匠付石棒を対象として形態変化の過程を示す。これらを対象とした理由は、動物の造形が維持されており、各部位の理解が比較的容易であるためである。

部位の呼称はA～Gまでのアルファベットを用いる。理由は、時期が降るにつれて形態が変化し、生物の部位名称（例えば耳など）と大きくかけ離れてしまう点と、一つの動物意匠製品の中に角度を変えることで複数の動物種を表現したとする、「メタモルフォシス」（畑 2004）であるとの議論があるため、より客観的に部位の位置を示すために用いている。

ただし、本稿では読者の理解を助けるために、「A（鼻・口）」のように併記することとする。

(1) 動物意匠製品の形態要素

図1は北海道芦別市滝里安井遺跡 P-45 出土の有孔石製品で、墓址の時期が続縄文前半期であることから、同時期に使用されたものと捉えている。この例はクマの表現とされるとともに、紐ずれ痕跡から装身具としての使用が想定されている。特にクマの造形を持つことから、後世のアイヌ文化におけるサパウンペ（冠）の前方につける動物像と同様の使用法であるとの類推もされている（畑 2004）。

本稿では滝里安井遺跡例で示した、A（鼻・口）、B（額・目）、C（耳）、D（喉）、E（前脚）、F（後脚）、G（尾）の部位名称を用いる（図1）。遺物によっては、Aは上顎と下顎に、C・E・Fはそれぞれ左右に細分され

る場合がある。

図2は北海道南西部から道央部で出土した動物意匠付の有孔製品と石棒を集成したものである。時期は出土した層位及び墓坑の時期であり、製作年代とは限らない。1の江別市高砂遺跡 P-1372 例は縄文晩期～続縄文前半期、2の江別市高砂遺跡表採品が縄文晩期と古い年代である他はすべて続縄文前半期のものである。

材質は余市町大川遺跡 GP-125 出土例（図2-7）が土製、伊達市有珠モシリ遺跡出土例（図2-8・9）が鹿角製である他はすべて石製である。土製品は石製品に比べて加工がしやすく、製作技法の相違があるため単純な比較はできないが、穿孔の存在から同様の使用法が考えられるため参考として例示した。

石製品のうち余市町大川遺跡遺構外（図2-5）は石棒の一端に動物意匠が付いたものであり、その他の有孔石製品とは区別される。ただし、石への彫刻という点では表現に共通性が見られるために例示した。

図2には部位を比較するために、便宜的にA（鼻・口）とC（耳）の位置を示している。四肢にあたるE（前脚）・F（後脚）を持つ例は滝里安井遺跡（図2-4）と有珠モシリ遺跡（図2-8）のみで、他は頭部のみの表現である。

B（額・目）は2箇所の非貫通孔により目を表現するもの（図2-2・5・7・9）と、額の突出と目の凹みという凹凸により表現するもの（図2-1・3・4・6・8）とに分かれるが、時期的な傾向は現時点では見出せない。

C（耳）は立体的に突出しているもの（図2-1・2・3・4・7・8）と、縦方向の2本の刻線により挟まれた部分

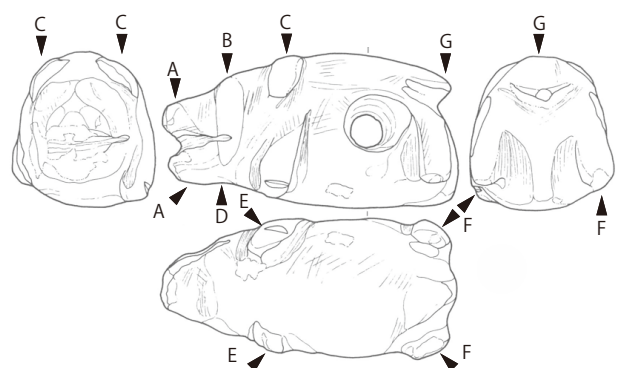


図1 動物意匠製品の部位名称（芦別市滝里安井 P-45・続縄文前半期）

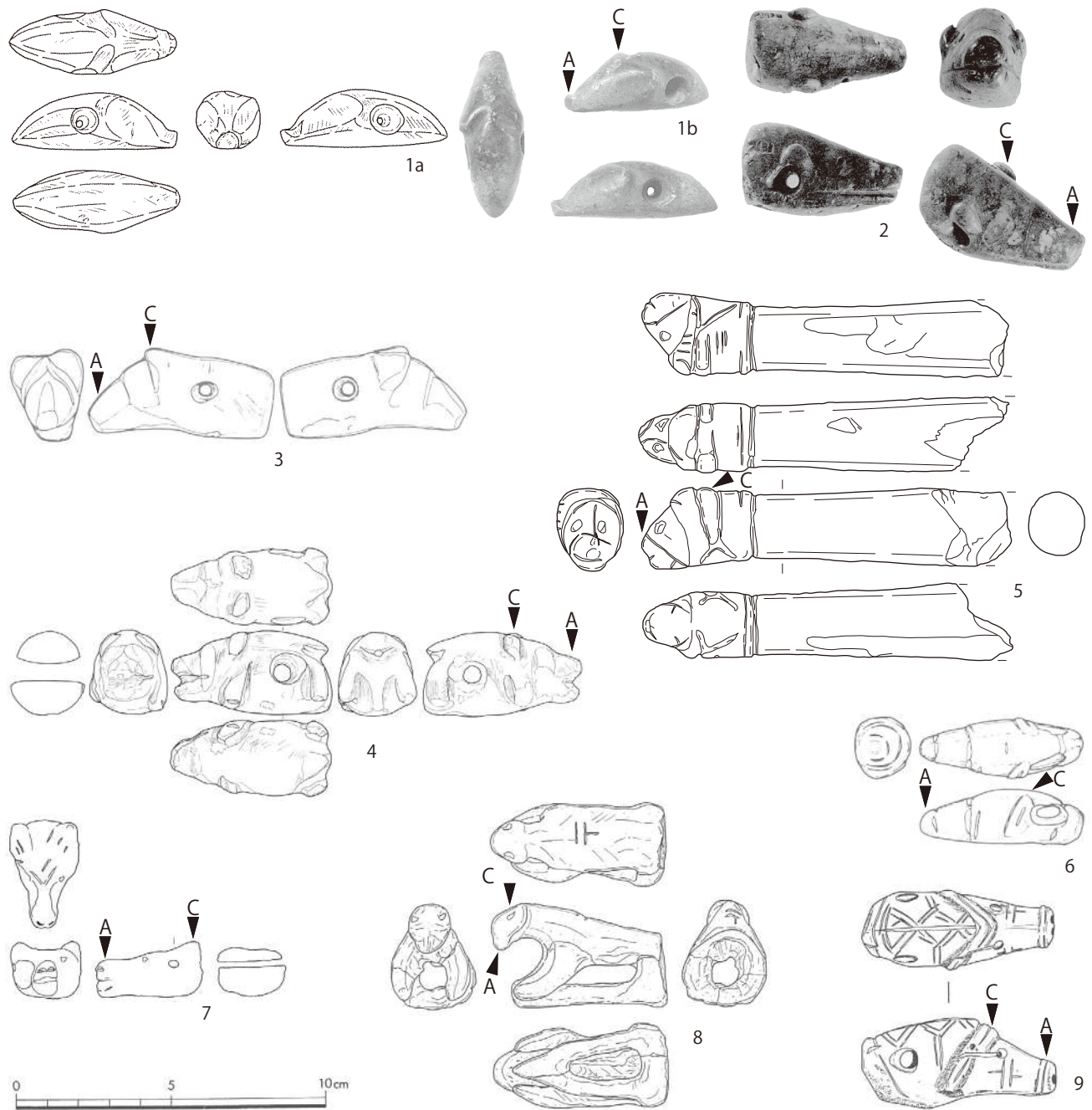


図2 動物意匠付製品 (1~5, 7: 石製、6: 土製、8・9: 鹿角製)

1: 江別市高砂 P-1372 (晩期末~続縄文期初頭)、2: 江別市高砂採集品 (晩期?・縮尺不同)、3: 江別市高砂 P-633 (続縄文期初頭)、4: 芦別市滝里安井 P-45 (続縄文前半期)、5: 余市町大川遺構外 (I-41 区 I 層)、6: 江別市旧豊平河畔 18 号住居 (続縄文前半期)、7: 余市町大川 GP-125 (続縄文前半期)、8: 伊達市有珠モシリ 11 号墓 (続縄文前半期)、9: 伊達市有珠モシリ 4 号墓 (続縄文前半期)〔7 は余市町教育委員会 2000 を再トレースし、他は各報告書から転載して部位名称を加筆〕

の盛り上がりで表現するもの (図 2-5・6・9) に分かれる。立体的表現である高砂遺跡出土の 3 点のうち 2 点は縄文晩期の可能性があり、古手の表現と捉えられる。この立体的表現は高砂遺跡 P-1372 (図 2-1) と滝里安井遺跡例 (図 2-4) を観察すると、周囲を溝状に凹めることで作出しており、これが簡略化して大川遺跡遺構外 (図

2-5) の刻線に置き換わったと捉えられる。

また、江別市旧豊平河畔遺跡例 (図 2-6) は A (鼻・口)・B (額・目)・C (耳) とともに立体感が薄れ、部位の境界が曖昧になっている。特に C (耳) は頭頂部よりも突出していない。その代わりに僅かに膨らむ楕円形の C (耳) の中央に刻線が 1 本加えられている。これは中

中央に刻線を施すことで特定部位を示す記号的な表現手法と捉えられ、有珠モシリ遺跡4号墓例（図2-9）と共通する手法である。

この有珠モシリ遺跡4号墓例（図2-9）のC（耳）は頭頂部よりも突出しないととも、左右が独立せずに繋がっており、退化の傾向が見られる。

以上のことから、動物意匠付の有孔製品と石棒におけるC（耳）の変遷は、頭頂部よりも突出した立体的表現であるもの（図2-1～4）が古く、頭頂部よりも突出せず、2本の平行刻線で区画したもの（図2-5）や、僅かな張り出しの中央に刻線を1本施すもの（図2-6・9）は新しい要素として捉えられる。

(2) 動物意匠付の棒状鹿角製品の概要

北海道出土の動物意匠付の棒状鹿角製品を集成したものが図3・図4である。江別市江別太遺跡例（図3-1）が縄文晩期～続縄文前半期とされる以外はすべて続縄文前半期に属する。

恵山貝塚出土例（図3-2・3、図4-1）は能登川コレクションと呼ばれる採集品であるため、細別時期は不明である。入舟遺跡例（図3-4）は続縄文前半期の貝層から出土している。

有珠モシリ遺跡出土品のうち、図4-2は2021年と2022年の調査で続縄文前半期の包含層から出土し、接合したものである。図4-4の有珠モシリ遺跡例は、縄文晩期とされる16号墓の覆土からの出土である。有珠モシリ遺跡は小さな島に縄文晩期から続縄文前半期にかけての貝層と、複埋葬を含む多数の墓址が重複する遺跡である。16号墓の覆土からは続縄文前半期の土器片も複数出土していることから、棒状鹿角製品は続縄文期に土層が乱された際の混入と考えられる。

南有珠6遺跡例（図4-3）はB-2調査区の続縄文前半期の貝層（VI層）からの出土である。貝層出土の土器は続縄文前半期の恵山Ⅱ式（青野2011）である。なお、この例のみ材質は鯨骨の可能性が指摘されている（西本1983）。

(3) 動物意匠付の棒状鹿角製品の形態分類

棒状鹿角製品の形状は一端が尖り、もう一端に動物意

匠が付く。実測図は正面に動物意匠のD（喉）が見える位置に配置することで、実測図上面に顔面が現れるようにしている（図3・図4）。

図3-1の江別太遺跡例は実測図正面・裏面の先端が細く突出しており、この部分がA（鼻・口）に相当する。A（鼻・口）から約3cm下位で、かつ最大径を有する部分には2個一対の突起があり、側面には非貫通孔と刻線が1本施されており、この部分がC（耳）に相当する。非貫通孔と刻線は玉抱き三叉文の変形であることはのちに述べる。A（鼻・口）とC（耳）の間は湾曲した凹みとなり、2本の刻線が目を変現していると思われる。この部分がB（額・目）にあたる。また、実測図正面は平坦であり、後述するD（喉）の凹みは存在しない。

図3-2の函館市恵山貝塚採集品は動物意匠の頭頂部を俯瞰した写真（実測図であれば裏面に相当）で、上端の突出部がA（鼻・口）、その下位の径が太く変わり、刻線文が施される部分がB（額・目）に相当する。さらに下位には写真の影から明らかに大きく突出した2個一対の突起があり、これがC（耳）にあたる。C（耳）の中央には刻線が施されている。

同じく恵山貝塚採集品の図3-3は上端が突出するとともに「く」の字に折れ曲がっており、この部分がA（鼻・口）となる。その下位の若干の凹みと突出する部分がB（額・目）に相当し、小さな刻みにより目を表現している。さらに下位には、一部欠損しているが2個一対の突起があり、C（耳）にあたる。C（耳）は中央に太めの刻線があり、その両脇に細い刻線が連続して矢羽状を呈している。また、D（喉）はやや凹んだ表現となっているが、海綿質を除去した凹みは見られず、それに伴う左右の穿孔もない。

図3-4の余市町入舟遺跡SM-1貝塚例は実測図正面・裏面の先端が尖って突出している部分がA（鼻・口）にあたる。実測図正面には口の表現と考えられる穿孔があることから、穿孔を挟んで上顎と下顎に分けることが可能である。

B（額・目）は目を表現した2個の穿孔がある凹み部分と、立髪のように大きく、先端に刻みが付いた突出部分からなっている。その下位の最大径の部分には2個一対の突起があり、これがC（耳）に相当する。C（耳）

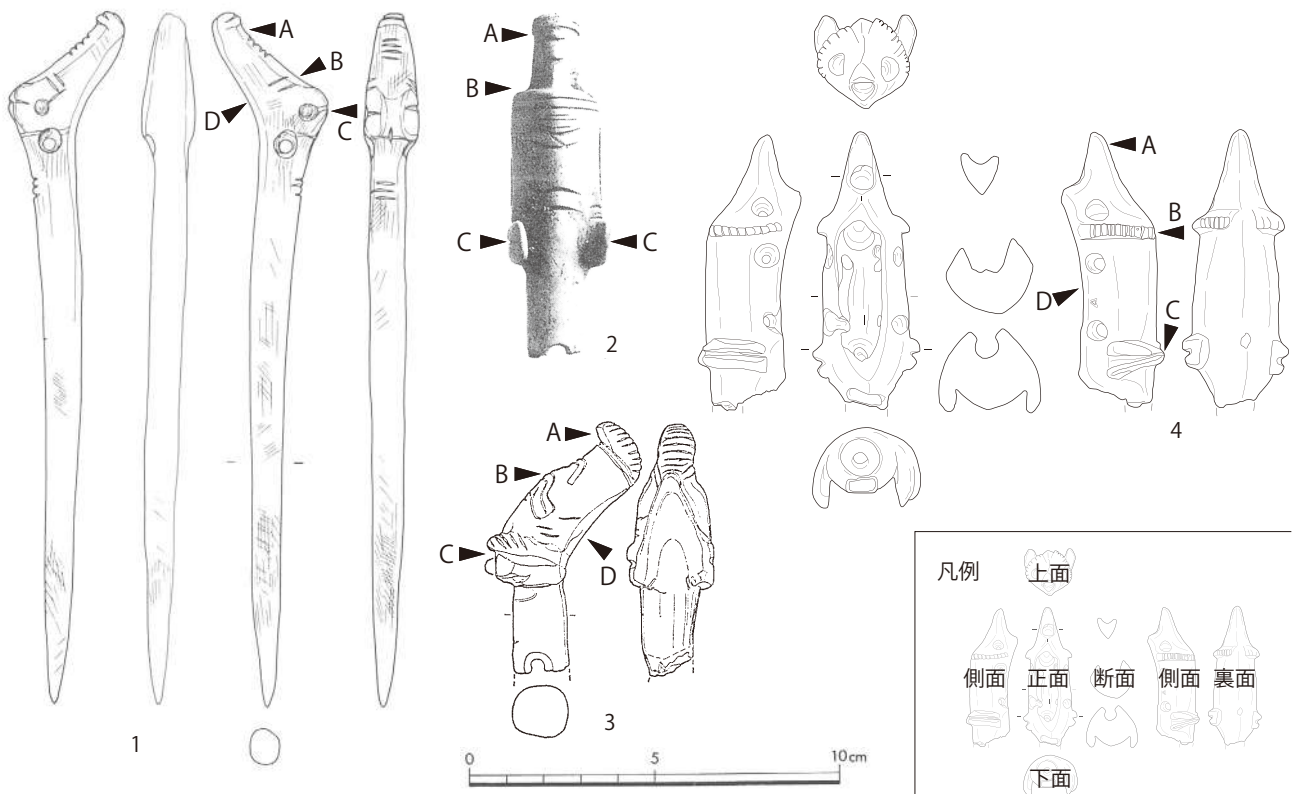


図3 北海道出土の棒状鹿角製品

1: 江別市江別太 (晩期末～続縄文期初頭)、2・3: 函館市恵山貝塚採集品 (続縄文前半期)、4: 余市町入舟 SM-1 貝塚 (続縄文前半期) (3は木村 1983 より転載、4は実測 (実測: 菅凜歩)、他は各報告書を転載して部位を加筆)

の側面観は二等辺三角形を呈して頭頂部を超えて突出しており、中央部には刻線が1本施されている。なお、実測図正面には鹿角の海綿質部分を除去した大きな凹みが存在する。

図4-1の恵山貝塚採集品は、上端の直角に突出した部分がA (鼻・口)、直下の凹み部分の穿孔が目の表現であり、隆起する額部分を含めてB (額・目)に相当する。C (耳)はB (額・目)から約3cm下位にある2個一対の突起部分が相当し、実測図側面では頭頂部を超えて突出している。実測図正面には海綿質を除去した凹みが存在する。実測図上面を見ると動物意匠の顔面が表現されていることがわかる。

図4-2の有珠モシリ遺跡1区貝塚出土例は上端が欠損しており、本来は恵山貝塚例 (図4-1)と同様に直角に突出したA (鼻・口)が存在したと思われる。残存する上端部にある1本の刻線による区画線は、恵山貝塚例 (図4-1)と同じくB (額・目)の隆起部分に相当する。C (耳)は上端から約5cm下がった部分で、実測図側面では突出していないが、実測図裏面では2個一対

の突起として捉えられる。C (耳)は中央に刻線文、その両脇に連続する斜行刻線が施され矢羽状を呈しており、恵山貝塚採集品 (図3-3)と同様の文様となっている。

図4-3の南有珠6遺跡例は、上端の直角に曲がり、細く突出する部分がA (鼻・口)に相当する。B (額・目)は2個の穿孔部分から直角の屈曲部分及びその下位の刻線文までが相当する。穿孔部分の凹みはサイズが小さいために不明瞭であるが、穿孔と重なる刻線が凹みの表現である可能性はある。C (耳)は上端から約4cm下位の部分にある刻線による区画が相当する。刻線は実測図側面と裏面にわたる2本と、その2本を裏面部分の短い刻線で連結させることで浮き彫りとしている。本来の立体的な突起と比べると著しい退化の傾向が読み取れる。

図4-4の有珠モシリ遺跡9号墓例は上端が直角に曲がり、突出する部分がA (鼻・口)に相当する。B (額・目)は2個の穿孔部分から直角の屈曲部分及び刻線文までが相当する。C (耳)は上端から4cm下位にある2本の刻線によりかろうじて認識できる。実測図正面・裏面・側面はともに突出する部分がなく、突起とは捉えら

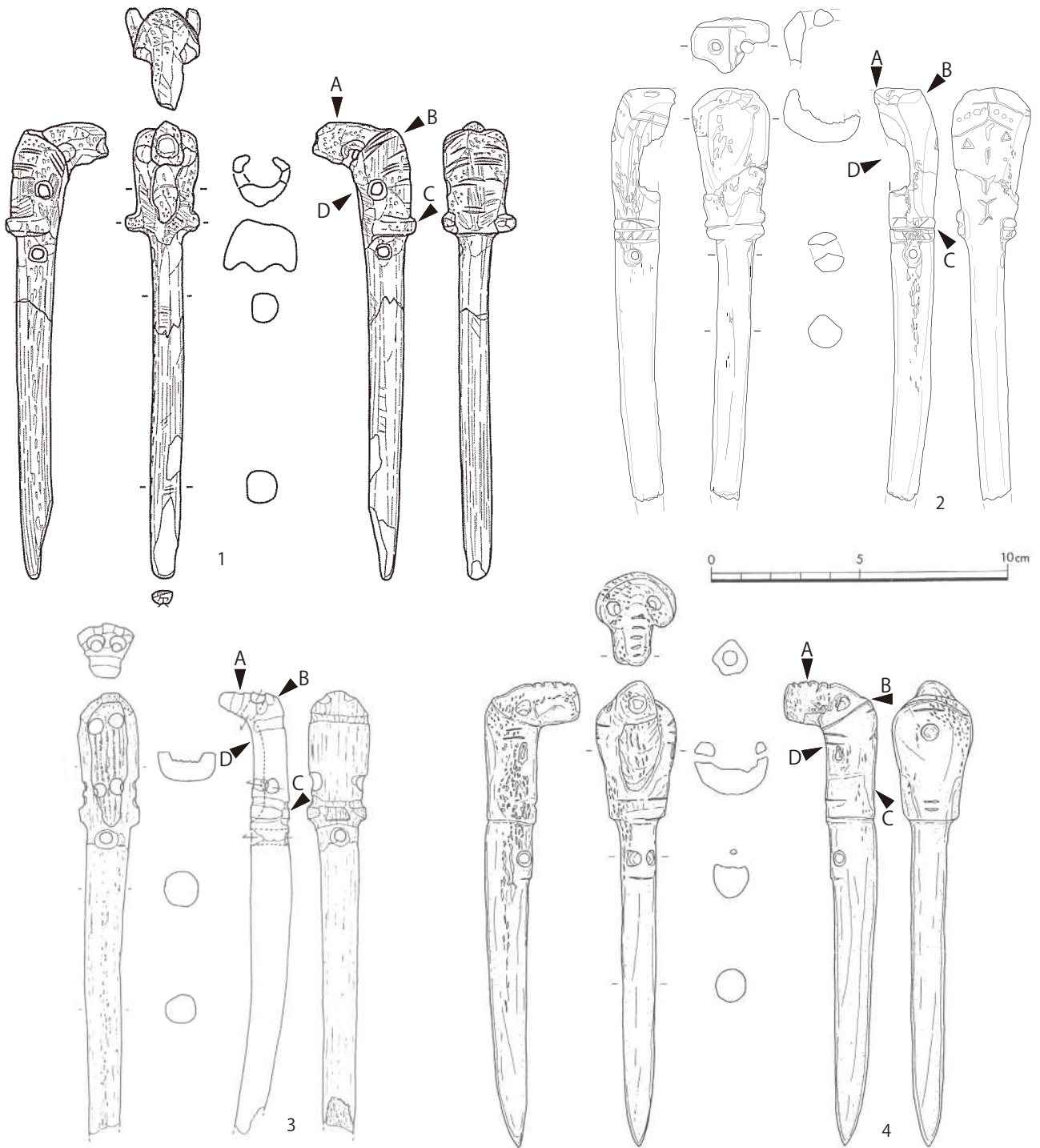


図4 北海道出土の棒状鹿角製品

1: 函館市恵山貝塚採集品 (続縄文前半期)、2・4: 伊達市有珠モシリ (続縄文前半期)、3: 伊達市南有珠6 (続縄文前半期) [1は川添 2022 より転載して配置を変更、2は実測 (実測: 菅凜歩)、3は報告書の実測図の配置を変更]

れないほど退化している。

上記の観察を基に形態分類を試みると、まずはD (喉) の凹みの有無は大きな要素である。これは鹿角の素材取りとも関連し、動物意匠全体の形状にも影響する。また、機能あるいは装飾に関わると思われる、側面からの穿孔は凹みのあるものにしかなされない大きな特徴で

もあるため分類基準とする。

平坦型: 動物意匠のD (喉) が平坦なもの (図3-1~3)
 凹み型: 動物意匠のD (喉) に凹みを有し、両脇に穿孔を持つもの (図3-4、図4-1~4)

次に、形態変化を顕著に示す部分として、C（耳）の突起の形態と文様の分類を行う。

1類：C（耳）が大きく突出し、中央に刻線文を持つもの（図3-1～4）、及び無文のもの（図4-1）

2類：C（耳）の突出が弱い、中央の刻線文を持つもの（図4-2）

3類：C（耳）が突出せず、両側の2本の刻線で区画するもの（図4-3・4）

上記の分類を組み合わせると、平坦型はすべてC（耳）が突出する1類に属し、凹み型は1類～3類のすべてが存在する。

各要素の新旧関係を動物意匠付有孔製品の形態変化を基に検討すると、C（耳）が立体的に突出する1類が古い要素と言え、突出が弱くなるとともに中央の刻線と斜行刻線を施す2類は後出の要素である。さらに2本の刻線のみとなる3類は退化傾向として捉えられるため、最も新しい要素と言える。

平坦型と凹み型の新旧関係は、C（耳）の形状が突出した1類のみからなる平坦型が古いと言える。

総合して考えると、D（喉）が平坦でC（耳）が突出する平坦型1類が最も古く、次に凹み型1類→2類→3類の順に変化したと捉えられる。

なお、凹み型は、A（鼻・口）とBの屈曲が緩やかで、最大径がC（耳）にあるもの（図3の4）と、A（鼻・口）とBが直角に屈曲し、最大径がB（額・目）にあるもの（図4-1～4）がある。前者の入舟遺跡例（図3-4）は、凹み型であるが、A（鼻・口）など他の形態が平坦型に近似しており、両者の中間形態、つまり過渡的な様相を示している。

4 | 骨角器の文様要素の把握

前節では動物意匠付製品と棒状鹿角製品の形態変化について述べたが、変化の方向性を確かめるには各遺物の年代や層位的関係が明らかである必要がある。しかし、対象遺物には採集品が多いことや、推定されている年代幅が広いことから難しい。そこで、縄文晩期から続縄文前半期の骨角器の文様変化を把握し、棒状鹿角製品の新旧関係の判別に用いることとする。

対象とするのは有珠モシリ遺跡と恵山貝塚出土の骨角器である。両遺跡の出土品は実用的な道具にも装飾が施されている。ただし、これらも縄文晩期から続縄文期の貝塚と多数の墓が重複する遺跡での出土のため、層位的な把握や共伴遺物による時期決定ができない難しさがある。さらには儀器との想定もされる動物意匠付製品は長期間伝世する可能性もあるため、遺構内での共伴遺物が必ずしも製作年代と同じとは限らない。

そこで、すでに編年が確立している北陸地方の縄文晩期土器型式の文様変化を参照しつつ、骨角器の文様要素に型式学的な検討を加え、棒状鹿角製品の新旧関係を把握する。

(1) 北陸地方の縄文晩期土器群の文様変化

北陸地方の縄文晩期（大洞B～BC併行）の土器には玉抱き三叉文が線状化し、I字文が連続する事例が存在する（小島ほか1994）（図5）。

御経塚1式の深鉢胴部には連結した玉抱き三叉文が横方向に連続している（図5-31）。これは図5-41の鉢に施された反対方向の2つの玉抱き三叉文の端部が接続した形と捉えられる。

御経塚2式は玉に連結する三叉文が2本の縦位の沈線と1本の横位の沈線に置き換わっている（図5-42）。沈線の幅に狭広はなく、線状化している。

御経塚3式では玉が消失して縦位の沈線となり、横方向に連続したI字文（図5-52）へと変化する。

御経塚式は亀ヶ岡文化の影響を受けて成立したとされ、1式と2式が大洞B式併行、3式がBC式併行に位置付けられている（小島ほか1994）。このことから、玉抱き三叉文の線状化とI字文の連続傾向は文様変化の方向性を確認する指標となる。

なお、北陸地方の縄文晩期前葉の土器と北海道の縄文晩期後葉～続縄文前半期の骨角器では、時期の隔たりが大きい。しかし、実際に玉抱き三叉文が地域によって残存することは事実であり、文様が施される素材（骨角器）や道具の機能・用途（儀器）により型式変化の速度が遅くなるのが要因の一つと考えられる。本稿では、地域と時期に違いがあることは認識しつつも同一の文様であることを重視し、変化の方向性についての参考としたい。

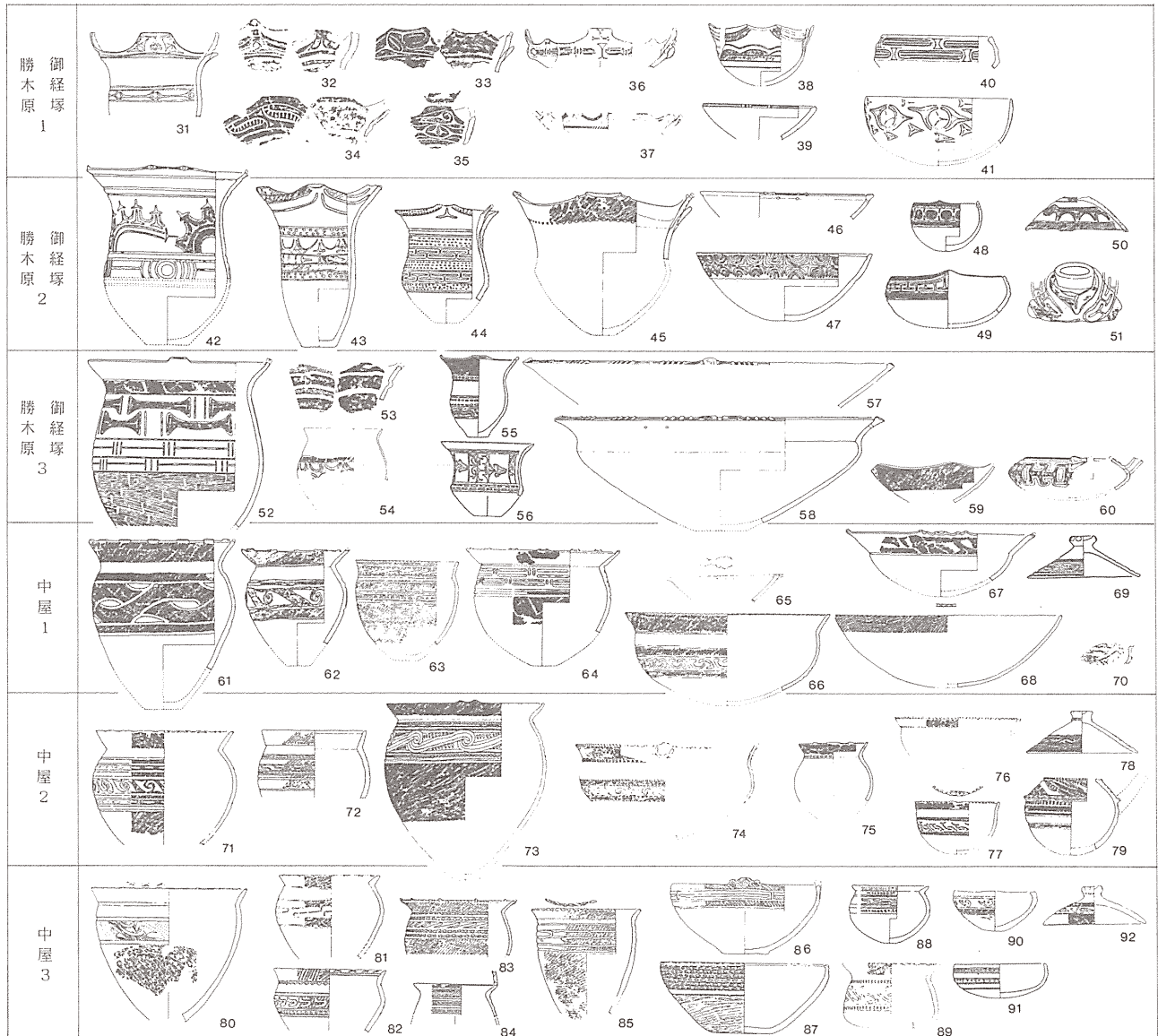


図5 北陸西部の縄文晩期土器編年〔小島ほか 1994 を改変〕(八日市新保遺跡 (36~38, 65)・うまばち遺跡 (63)・真脇遺跡 (70)・米泉遺跡 (71, 72, 74, 76, 80~82, 85~90, 92)・他は御経塚遺跡)

(2) 骨角器の玉抱き三叉文の変化

図6は続縄文前半期の代表的な骨角器である。渦巻状と直線状の刻線文と刻点による円形文が基本となっている。これらは一見すると多様な文様群ではあるが、縄文晩期の玉抱き三叉文からの変化として理解することができる。

文様は円形文と刻点文の有無で2つに分類でき、さらに刻線文の形状により6つ(三叉円文、ハ字文及びV字文、I字文、T字文及びテ字文、平行刻線文、交互刻点文)に分けることができる(図7)。

図8は玉抱き三叉文からの変化を模式化したものである。

①は「玉」の円形部分が渦巻きに置き換わったもので、下位の4つのV字文で一つの大きな三叉文となっている。渦巻きと三叉文の組み合わせは、宮城県二月田貝塚の縄文晩期の「Y形腰飾り」(春成 1985 p.31 図10-3)に類例がある。また、玉抱き三叉文からV字文への派生は、山形県蟹沢遺跡出土の縄文晩期の「鳥形腰飾り」(春成 1985)が良く示すように、三叉を構成する2本の刻線が独立し、ハ字状に連続している(図8-2)。蟹沢遺跡例は明瞭な玉抱き三叉文があることから、ハ字文・V字文は古手の要素とすることができる。

②は三叉部分が細くなった2つの玉抱き三叉文が反対方向を向きつつ連続している。

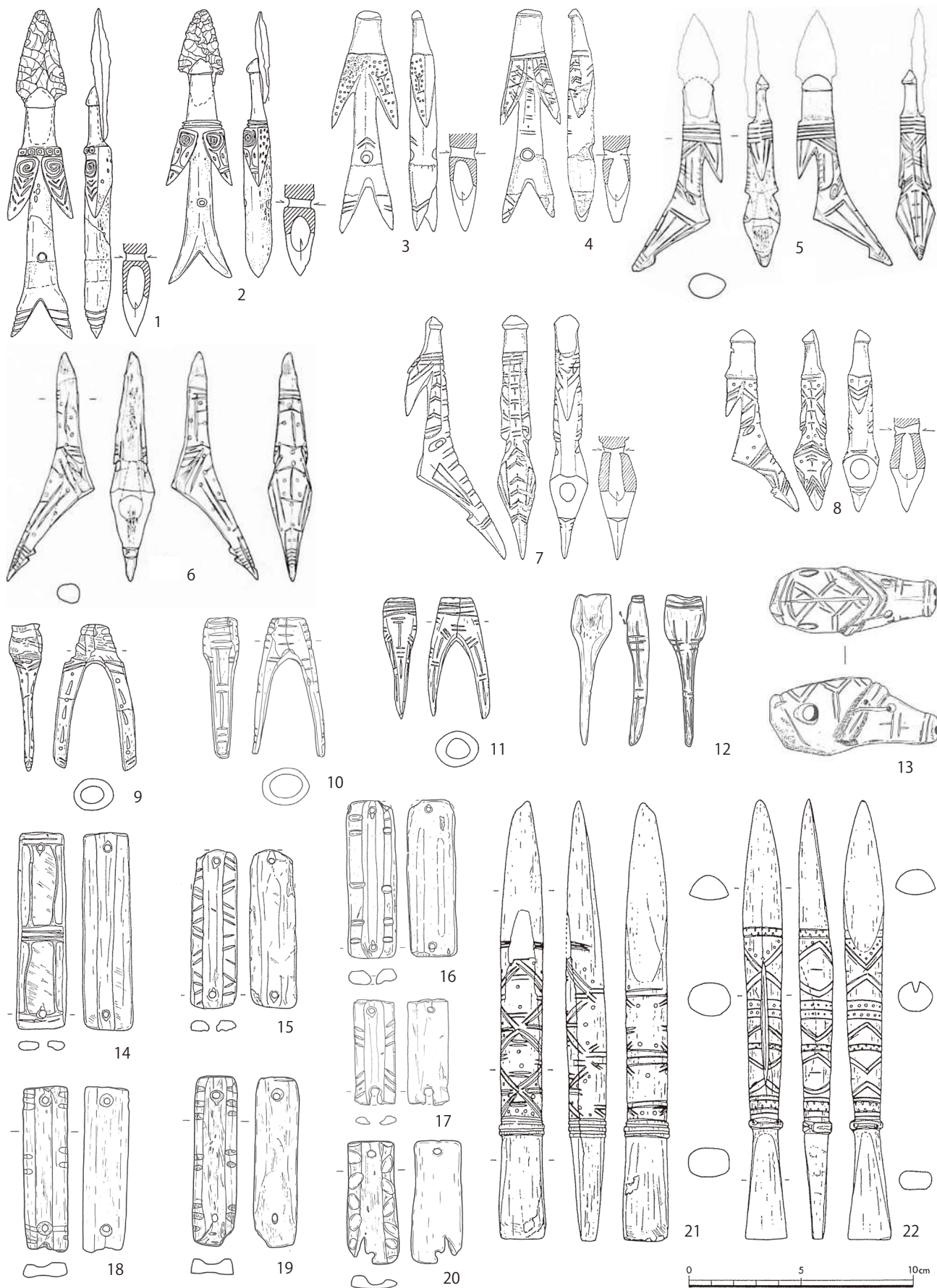


図6 続縄文前半期の骨角器の文様〔1~4・7~11・13~17・21・22: 有珠モシリ、5・6・12・18~20: 恵山〕




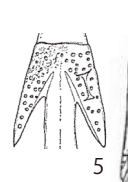
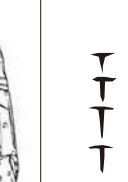


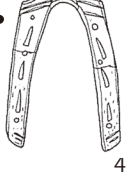





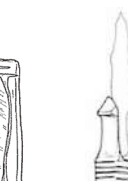
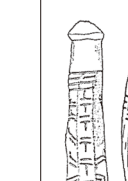



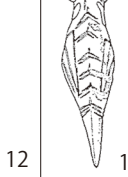

	円形文 + 三叉文			刻点文 + 刻線文			
	a: 三叉円文	b: V字文	c: I字文	c: I字文	d: T・テ字文	e: 平行刻線文	f: 交互刻点文
1: 円形文・刻点文あり							
2: 円形文・刻点文なし							
							
							

図7 北海道出土骨角器の文様の分類

③は2つの三叉文が結合することで、I字文となっている。この時点では刻線の太さに差異があり、三叉を意識した文様形態となっている。

④は刻線の幅が細く均一化したI字文が縦に2つ連なり、間に2本の刻線が引かれている。この2本の刻線は本来円形文が施されるべきものであるが簡略化された結果である。

⑤は複数のI字文が縦列した際に連結部分のみが抽出されて、T字ないしはテ字文となったものである。

⑥はテ字文の上半部の平行刻線が主要な文様となり、平行刻線によるT字・Y字・X字となる。

⑦は平行刻線中に刻点文が入り込み、直線的に並ぶものと交互に配置するものの2種が生まれる。

一方、円形に着目すると、図7の1~4までは円形と三叉の組み合わせであり、玉抱き三叉文が意識されていたが、5~10は小さな刻点文が多数配置されており、玉と三叉は分離する。ここに一つの画期がある。分離した三叉文はそれ同士が結合し、連続配置と部分的な抽出により新たな文様へと変化していった。

(3) 文様の変化の方向と骨角器の形態との関係

縄文期の骨角器には文様変化と形態変化が連動する例がある。

図6の9~12は離頭鉾の柄尻に装着する指掛け具である。9は柄に装着する部分が細くなった凸型である。文様は連続する玉抱き三叉文が施され、古手の文様である。これに対して10~12は柄との装着部は凹型と形態が異なっており、文様はすべて縦列するI字文が施されている。

図6の14~20は紐の長さを調節するアジャスターと考えられている骨角器である。14はI字文が縦列する文様が実測図正面にあり、溝は裏面に位置している。これに対して15~20は平行刻線が複数施される新しい段階のもので、溝は実測図正面に存在している。

以上のように、骨角器の形態と文様の変化が連動していることは、玉抱き三叉文から派生した文様の変化には一定の時間幅があるものと捉えられる。

これらのことから、骨角器の文様は、玉抱き三叉文→ハ字文・V字文→I字文→T字文・テ字文→平行刻線文→交互刻点文へと変化したと考える。

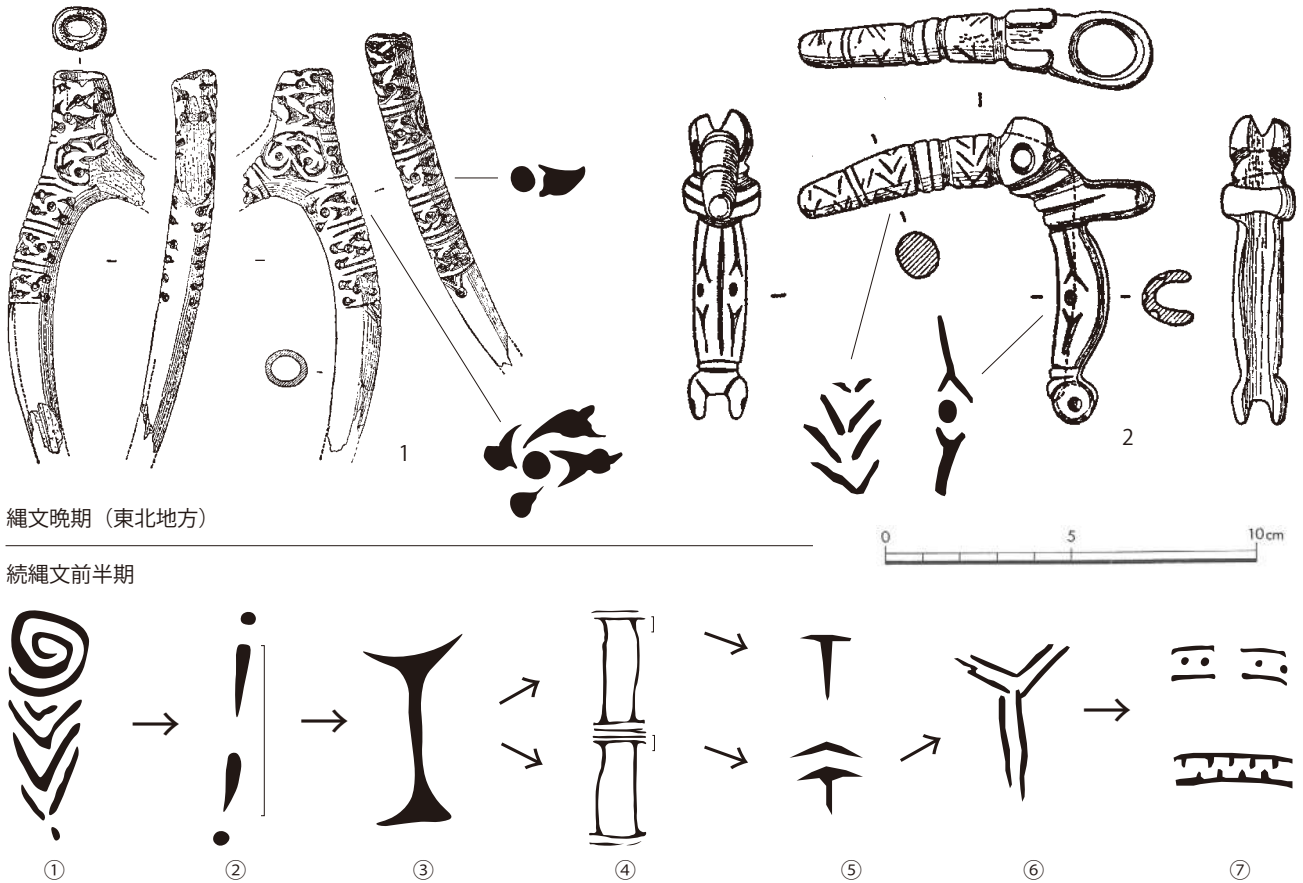


図8 骨角器の文様の変化

1: 岩手県陸前高田市中沢浜貝塚 (縄文晩期前葉)、2: 山形県東根市蟹沢遺跡 (縄文晩期中葉) (春成 1985 から転載し、文様部分をトレース)

①~⑦: 北海道出土の骨角器 (続縄文前半期) の文様をトレース

(4) 動物意匠付の棒状鹿角製品の新旧関係

次に、明らかとなった骨角器の文様の新旧関係を利用して棒状鹿角製品の新旧関係の妥当性を検証する。ただし、棒状鹿角製品に付けられた定型的な文様は少なく、事例は3例のみである。

江別太遺跡例 (図3-1) はD (喉) が平坦型で、C (耳) の左右の突出部に非貫通孔と刻線文の組み合わせが存在する。実測図左側面では非貫通孔である円文と1本の刻線文が接しており、刻線は突起の先端に向かって細くなり三叉状を呈する。実測図右側面では、C (耳) の中央の刻線文が円文に向かって施され、別の刻線も円文に向かって付けられている。

縄文晩期の骨角器には岩手県中沢浜貝塚の「鳥形短剣」(図8-1) のように、直径約5mmの非貫通孔から2ないし3方向に刻線を彫刻することで三叉文とする表現が見られる。ここではこれを三叉円文と呼称する。中沢浜例

は一つの円文の周囲に4つの三叉円文を配置している。単体の三叉円文は、円から3本の線刻が出る場合が基本だが、2本や1本のみのももあり、これが江別太例と類似している。類例は宮城県里浜貝塚の「Y形腰飾り」(春成 1985 p.31 図10-2) や青森県寺下遺跡の腰飾りの文様がある。

これらは縄文晩期前葉から中葉の時期とされ、縄文晩期末以降とされる江別太遺跡例はこの三叉円文の残存と捉えられる。図8の骨角器の文様変化の模式図に照らし合わせれば、①段階よりも以前に位置付けられる。

次に、有珠モシリ遺跡例 (図4-2) は、C (耳) の突出が弱く、中央の刻線文と斜行する平行刻線文を持つもの (凹み型2類) で、形態では中段階以降と判断される。実測図裏面にはI字文の連続から派生したT字文があることから、文様変化の⑤段階の時期と捉えられる。

最後に、有珠モシリ遺跡16号墓例 (図4-4) は、C (耳)

が突出せず、2本の刻線のみのももの（凹み型3類）であり、形態から最も新しいと想定したものである。実測図裏面には、本来I字文やT字文が連続する部位にテ字文から派生した短い平行刻線文があることから、文様変化の⑥段階の時期と捉えられる。

以上の3例は、棒状鹿角製品の形態変化の方向性と文様変化の方向性が一致することを示しており、事例はわずかではあるが、先の形態分類とその変遷の妥当性を示している。

5 | 本州出土の棒状鹿角製品との対応関係

本州の縄文晩期から弥生時代に存在する棒状鹿角製品は北海道の事例と関連することが示されている（春成 2021、2023、川添 2014、2022）。その際に、動物意匠の部位の認識が研究者間で異なっていることからここで整理しておく。

また、本州の棒状鹿角製品の分類にあたり、北海道出土の動物意匠付の匙形製品との関連性を検討する必要性についても述べる。

(1) 部位の対応関係

図9は春成による棒状鹿角製品の分布図を転載し、部位を追加したものである。

ここでは棒状鹿角製品の特徴的な2つの浮線文を持つ突帯の呼称を春成に倣い、上端部分を「端帯」、中位部分を「中帯」と呼ぶ。

春成は北海道の棒状鹿角製品の編年を示す際に、南有珠6遺跡例について、「基部の意匠の動物は熊と推定してまちがいない」とし、「頭は上から見ると、面長で口吻が尖っており、中帯は後肢、基端と中帯の間の凹みは腹部の表現であろう。前肢の表現がないのは、後肢で直立した姿勢を表しているのかもしれない」としている（春成 2023）。つまり、筆者が動物の頭部の表現と考えた部分を、全身像であると捉えている。

同様に川添は、恵山貝塚例（図4-1）の説明で「胴部内のくり抜かれた部分」、「背骨の高まりを表現」、「裝飾部下側の突起状は後足を表現」と記しており、全身像をイメージしている（川添 2022）。

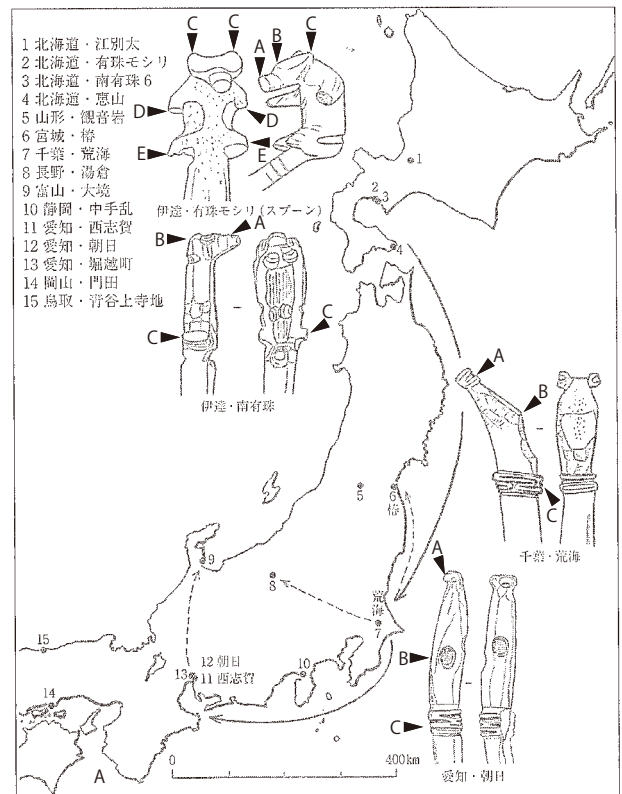


図9 棒状鹿角製品の分布と伝播推定図〔春成 2023 を転載して部位を加筆〕

しかし、これまで見てきたように比較的造形が理解しやすい動物意匠付の有孔製品（図2）を基に、北海道出土の棒状鹿角製品の形態変化を捉え直すと、A（鼻・口）からC（耳）までは動物の頭部のみの表現であると考えられる。

仮に、これらが全身像でCが後肢だとすると、Cが突出する入舟遺跡例（図3-4）と恵山貝塚例（図4-1）は、春成と川添が腹部とした凹み部分とは反対の、背中側に後肢が突き出てしまう。それよりは、Cを耳と捉えて、実測図上面を動物の顔面とみる方が自然である（図3-4、図4-1～4）。よって、棒状鹿角製品の上部に付けられた動物意匠は全身像ではなく、頭部のみの表現と考えるのが妥当である。

上記の理解を基に本州出土の棒状鹿角製品との対応関係を考えると、以下ようになる。

荒海貝塚例は端帯がA（鼻・口）、中帯がC（耳）となり、AとCの中間の屈曲周辺がB（額・目）となる（図9）。朝日遺跡例も同様であるが、この例は浅い凹みが90度角度を変えて2箇所ある特殊例であり、D（喉）と対応するのは実測図右側中央の非貫通孔である。

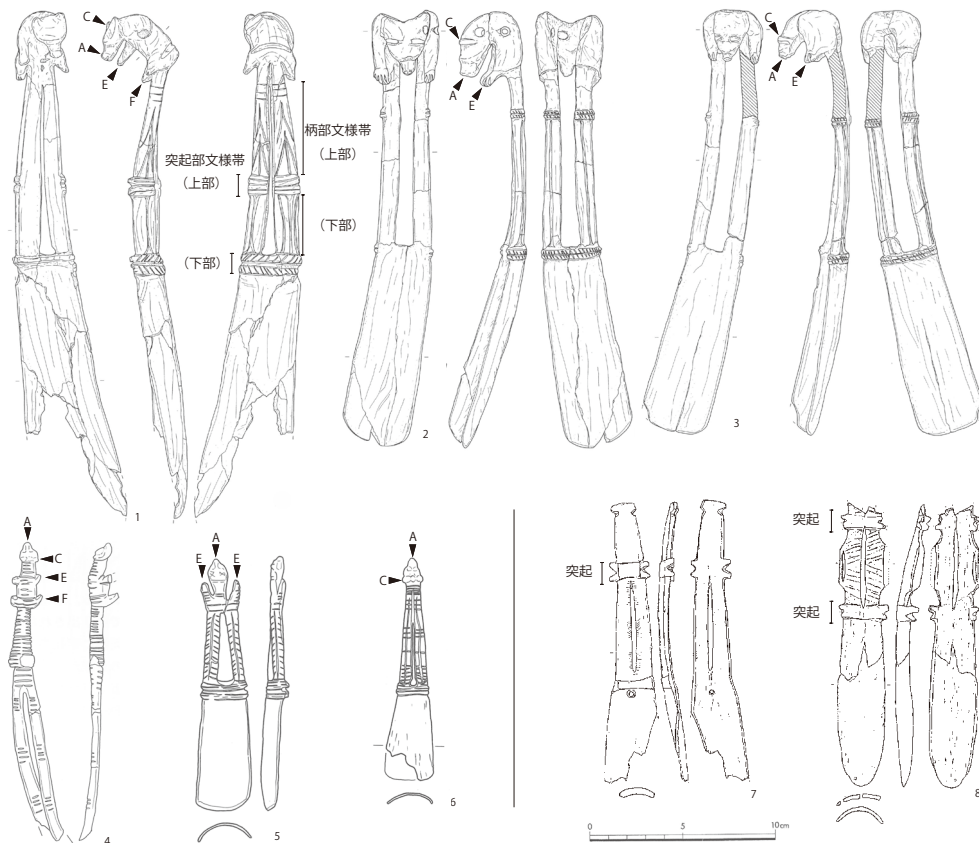


図10 縄文前期～続縄文前半期の匙型製品 (1～7: 鹿角製 8: 鯨骨製)
 1: 伊達市有珠モシリ4号墓、2・3: 伊達市有珠モシリ5号墓、4～6: 函館市恵山貝塚採集品、7・8: 伊達市北黄金貝塚 (縄文前期後葉) (各報告書を転載して部位を加筆)

(2) 棒状鹿角製品の分類

次に先行研究において、動物意匠の部位の捉え方に違いが生まれた理由を考えると、一見してクマを彫刻したと認識される有珠モシリ遺跡出土の匙形製品の存在が大きいためである。春成は有珠モシリ遺跡4号墓出土例(図9、図10-1)を図示するとともに、「有珠モシリ遺跡出土のスプーン形骨製品の基部に彫つてある動物が熊をあらわしているの、それと最古段階の南有珠例を比較するならば、棒状短剣の動物は明らかに熊である」(春成2023)と述べている。

しかし、器種の異なる棒状鹿角製品と匙形製品を結びつけるには形態の整理と分類が必要である。特に匙形製品は北海道北黄金貝塚に縄文前期後葉の事例があり、柄にスリットを持ち、外側に2個一対の突起を有する共通点は、祭祀道具として約4,000年間基本的な形態が受け継がれていることを示している。

匙形製品は棒状鹿角製品の出現以前から北日本に存在

した別器種であり、両者の影響関係を示すには、細分化された本州の棒状鹿角製品との対比が重要である。川添は「鹿角製装身具類」(川添2014)を形態別に分類しており、このうち、筆者が北海道出土の棒状鹿角製品と対応すると考えるのは棒状4類である(図11-5～7)。

棒状4類は端帯と中帯がある点と、凹みがあるものがないものの2種類ある点、全体形状が直線的である点が北海道の棒状鹿角製品と共通する。

一方、匙形製品は鹿角の角座部分を動物意匠とし、角の中心部の海綿質部分を除去することで緻密質を匙の柄と本体に加工している。有珠モシリ遺跡と恵山貝塚の匙形製品はすべて海綿質を取り除いて加工したものである(図10-1～6)。動物意匠は頭部のみのもので、頭部と前肢、全身を表現したものがあるが、いずれも上端に集中している。

上記の製作方法及び造形が上端にある点が共通するのは、川添分類の棒状1類である(図11-1～4)。棒状1類

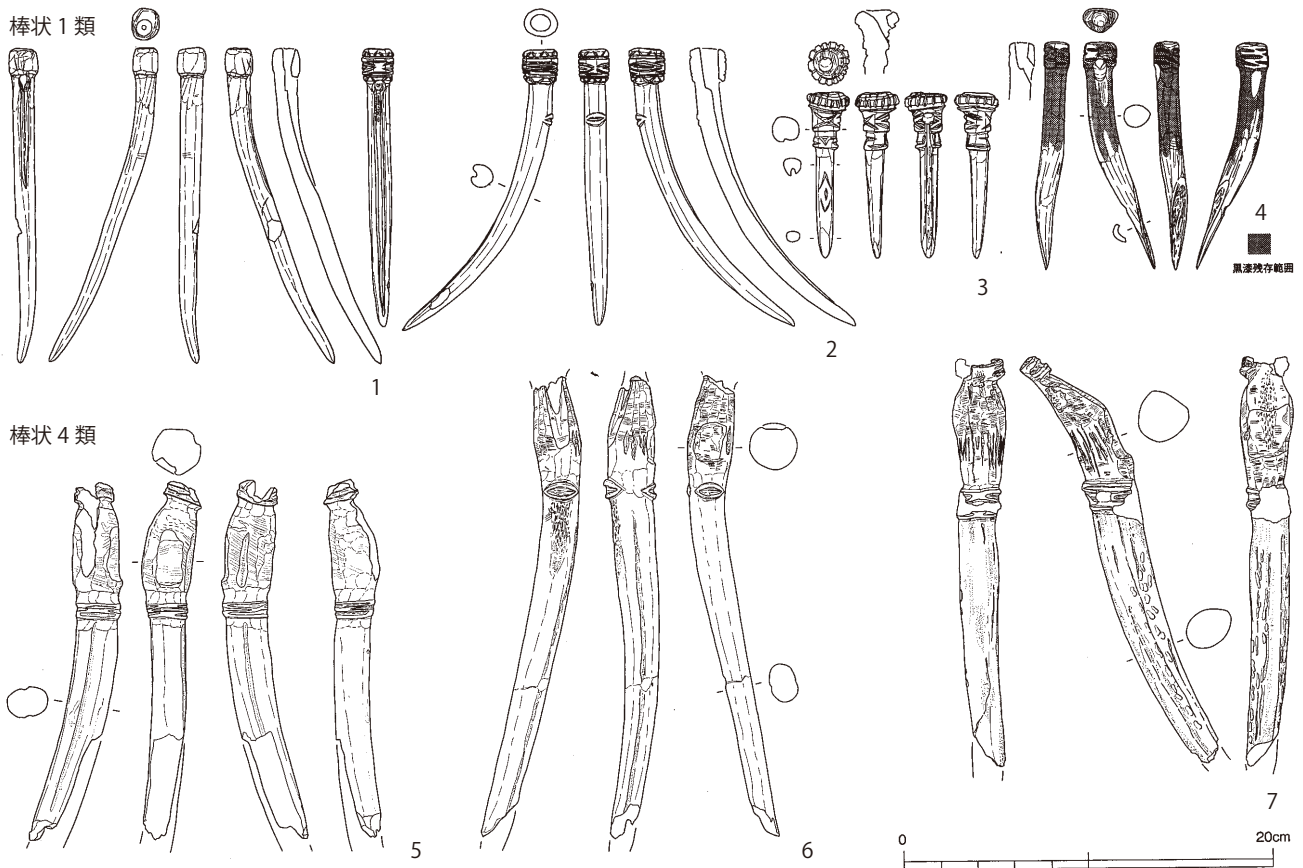


図11 川添による棒状鹿角製品の分類〔川添 2014 を改変〕

1・3: 愛知県保美（五貫森式期以降）、2: 長野県唐沢岩陰（縄文晩期末～弥生前期）、4: 大阪府水走（縄文晩期末～弥生前期）、5: 宮城県樺（大洞 A' 式期）、6・7: 千葉県荒海（千網・杉田Ⅲ式期）【1～4: 棒状1類、5～7: 棒状4類】

は端部から孔を開けて海綿質を除去するだけでなく、細長い溝を彫り凹めることで匙状にすることを意識している。まさに有珠モシリ5号墓例（図10-2）が上端から孔を開けて海綿質を取り除く方法で作られているのと同じである。また、全体形状は長野県唐沢岩陰例が顕著であるように弧状のものが多く、匙形製品と同様である。

川添は棒状1類から4類へ連続的につながるとしており、1類を縄文晩期後葉に、4類を弥生前期から中期前半に位置付けている。北海道出土の匙形製品は伴出土器から続縄文前半期に位置付けられているが、有珠モシリ遺跡4号墓例（図10-1）の柄部文様帯の上部は三叉文の変形したV字文が残っており、I字文のみである図10-2～6よりも1段階古い文様である。同様の文様は、棒状1類である保美貝塚例（図11-3）に三叉文から変化したV字文が見られる。

有珠モシリ遺跡4号墓例の製作年代が縄文晩期まで遡りうるかは検討を要するが、少なくとも匙形製品は縄文

前期から存在することから、縄文晩期にも同様の製品が存在したことは考えられる。匙形製品が棒状1類の誕生や形態変化に影響を与えた可能性も今後追求される意義がある。

以上、製作方法と形態の特徴から匙形製品と対比可能な本州の棒状鹿角製品について検討した。結果として、北海道出土の棒状鹿角製品は本州の出土事例のうちの棒状4類と、また匙形製品は棒状1類とそれぞれ対比されるべきものと考えた。その意味で、先行研究においてクマ彫刻の匙形製品が比較対象となってきたことも理解できる。

今後は、棒状1類が動物意匠からかけ離れすぎている点や匙形製品の柄部の文様との乖離などについて、地域的な影響関係と時期的変遷を加味しつつ検討することが課題となる。

6 | 動物意匠製品の捉え方

本稿では動物意匠のモチーフとなった動物種の特定についてはあえて触れなかった。理由の一つ目は、動物意匠製品が時期とともに形態を変える原因が、製作者・使用者の元来のモチーフへの意識の薄れや新たなモチーフとの融合があると考えたからである。

2つ目の理由は、一つの動物意匠製品の中に角度を変えることで複数の動物種を表現したとする、「メタモルフォシス」(畑 2004) である可能性があることによる。例えば、C (耳) とした当初は「耳」を表現した部位が次第に小さく、痕跡的にのみ残る現象を、「退化」として説明したが、アザラシなど耳が突出しない動物への転換や融合である可能性も否定しきれない。また、クマを表現したとされる事例が多い中でも、イノシシに見える有孔製品が出土した有珠モシリ遺跡では、実際に貝塚からイノシシの骨が多量に出土するだけにその可能性は否定できないなど、動物種の判断は容易ではない。

今後も動物意匠付製品のモチーフとなった動物種の追求は、アイヌ文化につながる北海道周辺においては重要である。その場合は、単に「何に見えるか」といったレベルではなく、より客観的な形態変化を示す方法を基礎にする必要があるだろう。

本州出土の棒状鹿角製品に対しては、部位の理解により、動物表現として認識できる事例もあり、その原型の追求や変化の要因についても検討していきたい。

謝辞

本研究は、「狩猟採集文化と農耕文化の接触による社会の変容と地域的多様性に関する学際的研究」〔基盤研究 (B) 代表：青野友哉 JSPS 科研費 18H00749〕、「受傷人骨の骨科学分析による縄文終末期の埋葬原理と社会変容の解明」〔基盤研究 (B) 代表：青野友哉 JSPS 科研費 22H00741〕、「考古学的方法による先史人類における社会構造の研究」〔学術変革領域研究 (A) 代表：山田康弘 JSPS 科研費 23H04837〕の成果の一部である。資料見学においては余市町教育委員会の浅野敏昭・小川康和・高橋美鈴・中塚風沙の各氏にお世話になった。実測図作成とトレース作業には菅凜歩(東北芸術工科大学歴史遺産学科)の協力を得た。川添和暁・福井淳一の両氏からは有益なご教示をいただいた。末筆ながらお礼申し上げます。

註

- 1) 北海道で同資料は「剣形製品」(北海道伊達市教委 2003)、「骨角製品」(佐藤・五十嵐 1996) と呼称されてきた。本稿では、春成が紹介した最古の大畑貝塚例が「棒状鹿角製品」(馬目 1975) であることと、川添が「棒状加工品」(金子・忍澤 1986) と「棒状短剣」(春成 1986) のうち鹿角製品を中心に「棒状鹿角製品」(川添 2001) とし、以後北海道出土の例も同様に呼称していることから、これに倣う。

引用・参考文献

- 愛知県田原市教育委員会 2017 『保美貝塚 渥美半島における縄文時代晩期の大貝塚』
- 青野友哉 2011 「続縄文文化と弥生文化」甲元眞之・寺沢薫編『講座日本の考古学』5 弥生時代(上) 青木書店 522-545
- 青野友哉・永谷幸人 2021 「有珠モシリ遺跡発掘調査概要報告」『歴史遺産研究』第15号 東北芸術工科大学：59-68
- 宇田川洋 2001 「動物意匠遺物とアイヌの動物信仰」『アイヌ考古学研究・序論』北海道出版企画センター 251-284
- 金子浩昌・忍澤成視 1986 『骨角器の研究 縄文篇』1 慶友社
- 川添和暁 2001 『「棒状鹿角製品」小考—朝日遺跡出土新資料の位置付け—』『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第2号：1-12
- 川添和暁 2014 「縄文／弥生移行期の鹿角製儀器の二者—棒状鹿角製品と有鉤鹿角製品について—」『古代文化』第4号：22-46
- 川添和暁 2022 「北海道島における続縄文期の棒状鹿角製品について」『三河考古』第32号：71-77

- 川添和暁 2023 「鹿角製装身具類の展開とその意義」『シンポジウム 縄文／弥生の骨角製装身具類の展開とその意義 骨角製装身具類からみえる社会変遷 発表予稿集』：3-14
- 木村英明 1982 「骨角器」『縄文文化の研究』6 雄山閣 143-165
- 小島俊彰・西野秀和・酒井重洋 1994 「北陸の土器編年」林謙作編『平成4年度科学研究費補助（総合A）研究成果報告書 縄紋晩期前葉－中葉の広域編年』：42-49
- 小杉康 1992 「考古学用語小考（先土器・縄文・遺物編）-- 亀形土製品は亀なのか」『駿台史学』85：44～100
- 斎藤裕彦 2005 「東北における動物形土製品：四肢獣形の変容・消滅」葛西勳先生還暦記念論文集刊行会編『葛西勳先生還暦記念論文集 北奥の考古学』 303-336
- 佐藤智雄・五十嵐貴久 1996 「能登川コレクションの骨角器について」『市立函館博物館 研究紀要』第6号：1-32
- 西本豊弘 1983 「第3節 骨角器」三橋公平編『南有珠6遺跡』札幌医科大学解剖学第二講座 36-40
- 畑宏明 2004 「続縄文時代前半にみられるクマ形の彫像について」宇田川洋先生華甲記念論文集刊行実行委員会編『アイヌ文化の成立：宇田川洋先生華甲記念論文集』北海道出版企画センター 31-40
- 春成秀爾 1985 「鉤と霊－有鉤短剣の研究－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館 1-62
- 春成秀爾 2021 「第4章総括 第3節 荒海貝塚の人びと」『国立歴史民俗博物館研究報告〔特定研究〕日本歴史における地域性の総合的研究－古代東国の地域的特性：千葉県荒海貝塚の発掘調査』第227集 国立歴史民俗博物館 459-467
- 春成秀爾 2023 「熊の意匠をもつ棒状短剣」『季刊考古学』別冊40：83-86
- 北海道江別市教育委員会 1984 『旧豊平河畔7丁目沢7』
- 北海道江別市教育委員会 1991 『高砂遺跡』(8)
- 北海道先史学協会 1979 『江別太遺跡』
- 北海道伊達市教育委員会 2003 『図録有珠モシリ遺跡』
- 北海道埋蔵文化財センター 1999 『滝里遺跡群』IX 第1分冊
- 北海道埋蔵文化財センター 2004 『恵山町 恵山貝塚』
- 北海道余市町教育委員会 2000 『余市町入舟遺跡』
- 北海道余市町教育委員会 2000 『余市町大川遺跡における考古学的調査』Ⅲ
- 馬目順一編 1975 『大畑貝塚調査報告』いわき市教育委員会
- 三橋公平編 1983 『南有珠6遺跡』札幌医科大学解剖学第二講座
- 女鹿潤哉 2000 「「クマ祭儀」の行方－縄文後期～弥生時代中期の北部東北地方と北海道における「クマ意匠」をめぐる一考察」『北海道考古学』第36輯：47-64

